

厚生労働科学研究費補助金（がん対策推進総合研究事業）
小児がん拠点病院を軸とした小児がん医療提供体制のあり方に関する研究
（松本班） 分担研究報告書

長期入院児における「遊び・楽しみ」による支援の役割についての研究

研究分担者 細井 創 京都府立医科大学附属病院小児科

研究要旨

小児がんをはじめとする慢性疾患に罹患した小児は、しばしば、治療のため長期の入院加療を余儀なくされる。「遊び・楽しみ」を取り入れた患者支援が長期入院児の成長発達にもたらす役割について明らかし、生命予後を保つとともに退院後も学校・社会への復帰がスムーズに行えることを目的として、京都の伝統を活かした「遊び・楽しみ」の年間行事を計画、開催した。さらに、AYA世代がん患者の心理社会的支援として、中学生、高校生の患児が交流できるよう、放課後の時間帯をイメージした中高生の集まる場（AYAサロン）を設置した。その結果、同世代の同性、異性との交流による、親からの心理的自立や、自己同一性の確立を促すことが出来た。

A. 研究目的

小児がんをはじめとする慢性疾患に罹患した小児は、しばしば、治療のため長期の入院加療を余儀なくされる。こうした小児、とくに急性期の強い副作用のある治療を受けている小児には、そのプロトコール治療を完遂するためには、入院生活における患者支援が必須である。

保育士を中心に、医師、看護師、心理士、社会福祉士、ボランティア団体、実習学生（医学科、看護学科、保健学科ら）らが連携し、企画した入院生活

を豊かにする「遊び・楽しみ」を通して、闘病生活をする子どもとその家族を精神的、心理的にサポートし、受けるべき治療が完遂でき、生命予後を保つとともに退院後も学校・社会への復帰がスムーズに行えることを目的とした。

また、入院生活では、同世代の同性、異性との交流が少なく、親からの心理的自立や、自己同一性の確立が妨げられることが多い。そこで、今年度は新たにAYA世代がん患者の心理社会的支援として、中学生、高校生の患児が交流できるよう、放課後の時間帯をイメ

ージした中高生の集まる場（AYA サロン）を設置し、多感な時期に長期入院を強いられるAYA世代の心理社会的支援について考察した。

B. 研究方法

1) 京都の伝統を活かした病棟行事の取り入れ

入院・治療しているからできないのではなく、入院していてもできる限り「普通のこと」ができるように、以下のような、京都の伝統を活かした「遊び・楽しみ」の年間行事を行った。

- 1月 女流書道家による書初め指導
- 2月 節分イベント、「お庭外・福は内」回診
- 3月 ひな祭りイベント、書道教室
- 4月 入学セレモニー、横綱白鵬病棟訪問
- 5月 春の屋上ステージ野外コンサート
- 6月 患者保護者ボランティアによる絵本読み聞かせ、指揮者佐渡裕氏とスーパキッズミニコンサート
- 7月 七夕祭り・祇園お囃子ボランティア演奏、提灯づくり、書道指導
- 8月 五山の送り火鑑賞イベントと夏祭り
- 9月 プロ芸人さんによる演芸
- 10月 ハロウィン回診
- 11月 秋のコンサート
- 12月 クリスマス回診、クリスマス会

2) AYA 世代の交流の場提供による心理社会的支援

中学生、高校生の患児が交流の場として、放課後の時間帯をイメージした中高生の集まる場（AYA サロン）を設置した。午後3時半から4時半にカフェラウンジを開放し、ソファやテーブルを設置し、ゲームや映画鑑賞会を行った。また、入院生活では、自分の選択で決められることが少なく、自己肯定感や自己効力感の低下につながるものが少なくないため、自分で選択したと感じられるように、AYA サロンですることや映画鑑賞会での映画の選択は、アンケートで患児の要望を取り入れるようにした。そして、ストレスに対処し、自己肯定感、自己効力感を高めるため、各自の目標を設定し、目的を持たせた。また、前向きな姿勢、楽観的な姿勢を持たせるため、感謝の気持ちをもつ姿勢、がんに罹患したことの意味づけを行った。さらに、周囲とのつながりを高めるため、中高生の集まり、AYA サロンを活用し、教育の機会やピアサポートの機会を提供した。

C. 研究結果

京都の伝統を活かした病棟行事は、単調な入院生活の中での患児や保護者のストレス緩和や気分転換、あるいは、京都における伝統行事の理解という面からも、患児やその保護者からも極めて好評であった。書道指導を通じて、

低年齢の患児であっても、保護者や医療従事者が推し量ることの出来ない児の内的感情の表出につながり、精神的サポートや看護につなげることが出来た。

AYA 世代に対する取り組みでは、同一疾患で同様の治療を受けている患者間では、同じ疾患で悩んでいるもの同士、悩みを話して共有ができ、同世代の患者と交流を持つことによって、普段感じている周囲からの疎外感を緩和させることができた。その結果として、1)自分で決めた内服のスケジュールで、内服に取り組むことができようになり、2)希望の職業に就くための情報を集め始めるなどの変化がみられた。

D. 考察

小児がん診療では、医師や看護師が治療し、ケアするというだけではなく、子どもの治療や入院生活に関わる全ての職種のメンバーが一体となって、患者である子どもとその子どもをとりまく家族や兄弟たちに対してケアを包括的に行う必要がある。チーム医療に関わる専門家には、1)治療のために痛いことも嫌なことをする人、すなわち、医師・看護師と、2)嫌なことはやらない人、すなわち、薬剤師、栄養士、保育士、ソーシャルワーカー、教師、チャイルドライフスペシャリスト、心理士、さらにボランティアなどに大別できるが、チーム医療がうまく機能するために、各スペシャリストが、

お互いの役割を尊重し理解し合うことが重要である。京都の伝統を取り入れた病棟行事を行うにあたり、多職種が頻回にカンファレンスをもち、意思疎通を図っていくことで、満足度の高い長期入院児の支援を行うことが出来た。長期入院児は、治療にともなって生じる環境の変化に対して、種々のサポートを得ながらそれを乗り越え、退院後に自立していく必要があるが、定期的な病棟行事開催を行い、それに積極的に参加していくことで、遊び・楽しみの中でより児の力を引き出し、自己肯定感や自立性を高めるのに役立っているのではないかと考えられた。

AYA 世代のがん患者は自己肯定感、自己評価、自己効力感が低い。服薬やケアができたことや、日常生活での出来事まで、しっかり賞賛することにより、自己肯定感を得る助けになった。内服やケアの方法について、自分で選択できるように選択肢を挙げ、自己効力感を得られるように、本人と決めることができた。

AYA 世代がん患者は、小児・高齢のがん患者とは異なる心理社会的支援を必要とする。また、AYA 世代の正常な心理社会的発達と、がんの診断・治療に伴う様々な喪失を理解し、支援を行うことが必要である。レジリエンスの促進因子を念頭に置いて、喪失から再生の過程での介入を調整していき、post-traumatic growth を促す環境を整備することが重要であると考えら

れた。

E. 結論

小児がん患児における「遊び・楽しみ」と取り入れた患者支援は、児の力を引き出し、自己肯定感や、親からの心理的自立、自己同一性の確立を促し、退院後の社会復帰につなげることが出来るのではないかと考えられた。

F. 研究発表

1. 論文発表
該当なし

2. 学会発表

宮地充、齋藤多恵子、平本梨花、柳生茂希、桑原康通、土屋邦彦、家原知子、細井創. 小児医療センターにおけるAYA世代がん患者の心理社会的支援.

第4回京滋サイコオンコロジー研究会.
2015年8月28日、京都

太田真由美、宮地充、桑原康通、土屋邦彦、家原知子、細井創、松尾恵美.
「病棟でのエンドオブライフケアの1事例 意思を言語化できない児の最善の利益を家族と共に考える 第13回日本小児がん看護学会学術集会.
2015年11月28日、山梨

板山有希、田中英子、太田真由美、石川美緒、藤岡陽子、宮地充、松尾恵美.
当院におけるAYA世代がん患者への取り組み. 第38回近畿小児血液・がん研究会. 2016年2月13日、大阪

G. 知的財産権の出願・登録状況

該当なし